様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０７５

研究課題名（和文）福岡県における占領期の保育―保育先進県の戦後保育構築に関する実証的研究

研究課題名（英文）A study on the early childhood care and education in Fukuoka under the American occupation

研究代表者
清原　みさ子（kiyohara, misako）

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：００００９０３６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円、（間接経費）　　750,000円

研究成果の概要（和文）：　県は昭和26年度に11のモデル保育所を指定し、公開保育と研究会を行ない、保育の質を向上させる取り組みがなされた。それ以前に、戦後の混乱から子どもを守り、保育を進めようとする動きがあった。昭和21年に福岡県保育連盟が発足し、機関紙『育てつつ』が発行され、地区ごとの研究会が開催され、昭和20年代の半ばまでは、保育所、幼稚園両方の保育者を対象としていた。保育所への補助に関しては、共同募金からの補助が福岡県では特に多かったことが明らかになった。
　戦後すでに70年近くが経過していることもあり、得られた資料は限られていたが、占領期を中心にした昭和20年代の福岡県の保育状況の一端を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：The association of Fukuoka early childhood care and education was established in 1946. This association published the peariodical 'Sodatetutu'. Under the auspieces of this association, the lecture meetings were held. The teachers of kindergartens and nurseries attended those meetings together. Fukuoka prefecture was divided 5 areas. In each area, the monthly meeting for study on the subject of early childhood care and education. In Fukuoka, Kyoudoubokin assisted the operation of nurseries.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼児教育・保育史　占領期　保育内容・方法

１．研究開始当初の背景

「福岡県における戦後のモデル保育所に関する実証的研究」での資料収集の過程で入手した福岡県保育連盟の機関紙『育てつつ』（２号分）と、「九州保育新聞」から、福岡県では幼稚園と保育所が公・私立一緒に活動していたことがわかった。

また、昭和 26 年度に 11 ヵ所のモデル保育所を指定して、公開保育と研究会を行って、保育の質の向上の取り組みがなされたが、その背景には、それ以前に、戦後の混乱の中で、子どもを守るため保育をすすめようとした真摯な活動があったことがうかがわれた。

そこで、現存する資料を収集し、戦後、特に昭和 20 年代前半の保育を築く努力をしてきた先人たちの活動を少しでも明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

戦後の保育史研究を進める上で、対象とすべき先進県の一つであった福岡県の占領期を中心とした昭和 20 年代の保育をめぐる動向を明らかにすることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

聞き取り調査および現存する当時の資料の収集によるものである。

４．研究成果

第二次世界大戦末期の昭和 20 年に入ると、博多をはじめ各地で大空襲を受け、多くの人々が家屋や家族を失った。また、戦後は外地からの引揚者の約 30%が博多港へ戻ってきた。このような被災者たちは、住宅難、食糧難と闘いながら、生活復興の努力をしていた。孤児や栄養失調の子どもたちの多くは、文字通り日々命がけであった。

このような状況に対して、県では官民あげて乳幼児の保護と教育を進めてきた。

(1)　共同募金からの補助

保育施設の設置、施設・設備の拡充には、共同募金からの配分が大きかった。他府県と比較して、保育所への配分が多いという特徴が、明らかになった。

昭和 23 年までの総額 4,041 万円のうち、40%が児童福祉事業に配分され、そのうち 884 万円が 63 保育所に配分された。昭和 24 年度には、県内 177 保育所の約 60%に相当する 108 保育所が配分を受けた。

こうした経過を経て、昭和 29 年までに 70%弱の保育所が補助を受けていた。

配分の仕方の特徴として、以下のことが明らかになった。

まず、戦前から保育事業を手掛けていた保育所が優先された。

さらに、昭和 26 年にモデル保育所に指定された保育所では、児童福祉施設最低基準に達しない状況を改善するため、積極的に嘆願書を提出する等の運動をして、配分を受けていた。

また、戦後の新設保育所に対しても、公・私立を問わず配分を行った。

このような共同募金からの配分以外に、ユニセフやララなどから、小麦粉をはじめとした支援を受けていた。帳簿が残されていた保育所があったが、その全容の解明に関しては、今後の検討課題として残された。

(2)　保育団体

福岡県の保育運動を支える基盤となった保育事業団体について、「九州保育新聞」を中心に調べた結果、次のことが明らかになった。

この新聞の発行人である岡田英資は、戦前から保育事業を推進してきた関係者たちに呼びかけ、戦後の保育事業を県レベルの組織として、発展させようとした。

しかし、保育団体結成は容易ではなく、何度も団体名の変更や役員等の選出を模索しながら、戦後の新しい保育観の一致や保育団体の必要性を認識していった。

昭和 23 年ごろから、福岡県保育連盟は、全国保育連盟と共催しながら、著名な講師陣を招いて、研修会を開催し、保育の質的向上に取り組んだ。

「全日本保育連盟」などと連動しながら、独自の活動を展開し、その成果として第 4 回全国保育大会を昭和 25 年に福岡市で開催した。

福岡県を「京築」「両筑」「福岡」「筑豊」「北九州」の 5 地区に分け、各地区では、研究会が行われていた。公開保育を行った施設もある。研究会には、公・私立の保育所、幼稚園の関係者が共に参加していた。

２年制の本科（1 年間の実習を含む）養成課程による独自の保母養成所を開校し、質の高い保育者養成を手がけようとした。

(3)　保育の実際

保育の質を「保育理念・保育内容等」「施設・設備等」「保育者の資格・待遇等」という三つの次元から考察した。

本研究では、19 保育所のうち関係者から聞き取り調査ができたのが 10、資料のみが 9 であった。幼稚園は、17 園中、聞き取りができたのは 7、資料のみが 10 であった。上記三つの次元について、すべての施設の状況がわかったわけではなく、わずかなことしかわからなかった施設も含まれる

①保育所の場合

戦前から保育を始めていた施設が 11 ヵ所と多かった。設立者は、寺院、個人、市町村というように、様々であった。戦前からあった保育所は、寺院を母体とした施設が多く、季節託児所から発展した施設もある。終戦後、早々に設立された保育所は、当時の貧しい子どもや働く母親、行く先を失った引揚家庭を支援したいという篤志家や町内会役員など

の個人によるものも少なくない。農村でも市部でも、困っている家庭の乳幼児を保護し、働く母親を支援したいという保育理念の施設が多かったが、小学校の中に開設されたり、就学前教育への情熱から始められたところや、裕福な家庭の子どもたちが多かったところもある。

保育時間は、朝 8 時から 8 時半に登園してきて、15 時から 16 時に降園のところが多かった。一応決まった時間はあるものの、早く来た子は園庭で遊んでいたり、迎えが遅い子は園長が自宅で預かったりしていた。必要とあれば早朝から夜まで、園長や保母が面倒をみていたという施設もあり、生活が安定しない家庭の状況に配慮して、子どもの保護、養育を援助していたことがわかる。

登園後は、園児の健康状態の把握などを行ってからは自由な遊びが主で、その後は、歌や遊戯、製作や絵本、紙芝居など一斉の設定活動であった。11 時半から 12 時に昼食、食後は年齢の低い子や寝たい子だけ午睡があったり、夏場は午睡があったりした。大半の保育所では、自由な遊び、おやつの後に降園していた。

行事では、最も多かったのが運動会、次いで遠足と雛祭りであった。七夕や雛祭りで遊戯会をしていたところも合わせると、遊戯会は多くの保育所で行われていた。

施設・設備に関しては、寺の本堂で保育をしていた保育所の多くは、共同募金からの配分によって増改築が行われた。仏教以外の保育所でも、共同募金による改修や増築が行われていた。共同募金の配分がない保育所でも、園児数の増加による定員変更に伴う拡張はなされていた。

戸外遊具の設置状況がわかったところでは、最も多かったのはブランコであった。ブランコと一口にいっても、木の間にロープを下げたものや木枠にロープで座板をつるしたものもあれば、箱型の 6 人乗りのものもあった。次いで多い順に、滑り台、ジャングルジム（枠登りを含む）、砂場、鉄棒で、シーソーもあった。このほか、太鼓橋や、遊動円木が設置されている保育所もあった。こうした固定遊具のほかに、三輪車や竹馬があった保育所や、園庭に鳥小屋や動物小屋があって飼育をしているところもあった。

室内にはオルガン（ピアノは 1 ヵ所のみ）が備えられていた。蓄音機があり、レコードをかけて遊戯をしていたことがうかがえた。太鼓やタンバリン、鈴のような楽器や、積木や黒板、ままごと等も備えている施設があった。こうした遊具が簡単に入手できたわけではなく、手作りや廃物利用、知り合いを頼んだりして、戦後の物資不足の中で、充実させる努力がなされていた。

保育者の資格や養成に関しては、戦前に保姆養成所を修了した人、小学校教師経験者がいる保育所が多く、戦後、保母のための講習を受講していた。働きながら県の実施する試験を受けて資格取得した人たちもいた。このように、保育者の大半は無資格ではなく、戦後の早い時期から保育の質の向上が目指されていたと言えよう。

保育者の人数は、子どもの数が増えると増やしていて、4～5 名のところが多かった。待遇がわかったところは少なかったが、昭和 20 年代の半ばには月額 4,000 円前後であった。

②幼稚園

対象になった幼稚園は、歴史的にも古い園が多いこと、キリスト教の園が多いことという特徴があった。キリスト教の幼稚園は、教会に附設されていて、宗教教育が大切にされていた。仏教の園でも、幼児期からの宗教教育の必要性から開園されていた。町内の教育委員や資産家による寄付で、出発した園もある。

保育時間や一日の流れは、ほとんどわからなかったが、わかったところは 9 時頃登園、13 時半から 14 時に降園であった。

キリスト教の園では、礼拝、讃美歌、園長の聖話、仏教の園では、仏様の歌がうたわれていた。絵や歌、自由遊びをしていた。ピアノによるリズム遊びや絵具を使った絵、空き箱の製作なども行われていた。全園児対象ではないが、バレエやバイオリンを教えていた園もある。

行事の様子がわかった園では、運動会が最も多く、次いでクリスマスであった。これはキリスト教の園が多かったことによると思われる。遠足、遊戯会、雛祭りの順である。このほか、発表会、作品展、誕生会、音楽会、芋掘り等を行っている園もあった。

施設・設備に関しては、歴史の古い園では、戦前からの施設をそのまま活用していたが、空襲を受けた地域では、焼け残った園舎で保育を再開していた。戦後に開設された園は、寺の本堂の一部を保育室にしたり、教会に園舎を附設したりしていた。

屋外遊具では、滑り台とジャングルジムが多く、次いでブランコと砂場であった。太鼓橋や鉄棒、シーソーや遊動円木もあった。室内備品がわかったところにはピアノかオルガンがあった。紙芝居や絵本、積木、楽器を備えている園もあった。戦前からあり、焼失しなかった園では、様々な遊具、教材が準備されていたが、戦後に開設された園では全くない状況ではじめ、大変だったところもある。

教師は西南学院をはじめキリスト教の大学出身者が多く、有資格者であった。待遇がわかったのは 1 ヵ所のみであったが、昭和 20 年代の半ばに 5,000 円であったという。

③まとめ

保育時間は、幼稚園と保育所では当然のことながら、保育所の方が長かったが、それでも一日 7 時間くらいのところが多かった。

行事に関しては、保育所、幼稚園とも最もよく行われていたのは運動会で、遊戯会、遠足や雛祭りが比較的よく行われていたのも共通であった。

施設・設備の戸外遊具では、順序には違いがみられたが、滑り台、ジャングルジム、ブランコ、砂場が多いのは共通であった。

（4）占領期を中心とした昭和 20 年代の保育をめぐる状況の特徴

以上のことから、福岡県の特徴として、以下の 5 点があげられる。

１）戦後の保育所の設置、施設・設備の充実には、共同募金からの配分が大きく寄与していた。

２）行政主導ではなく、保育に関わる有志たちが専門団体を結成し、主体的な活動を展開することによって、保育の質の向上を図っていた。

３）講習会や研究会に、特に昭和 20 年代半ばまでは保育所と幼稚園両方の保育者が参加していた。

４）保育の実際では、特に戸外遊具、行事、保育内容で、保育所、幼稚園とも共通したところが多かった。

５）保育者の養成に関しては、戦前からあった福岡保育専攻学校（西南保姆学院から校名変更、昭和 25 年から西南学院大学短期大学部児童教育科）が、中心的役割を担っていた。学院の附属施設として、幼稚園と保育所の両方を有しているという特徴があり、ここで養成された多くの保育者たちが、戦後の福岡県の保育所と幼稚園において共に活動した。それには、同学院の中心であった福永津義の存在が大きかった。

戦後 70 年近くが経過し、入手できた資料には限りがあったが、昭和 20 年代の保育をめぐる状況を一定程度明らかにできたと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

清原みさ子・豊田和子・原友美・寺部直子・榊原菜々枝「福岡県における占領期の保育（１）―「九州保育新聞」の分析を中心に」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第 61 号、査読無、2012 年、pp.51-60

清原みさ子・豊田和子・原友美・寺部直子・榊原菜々枝「福岡県における占領期の保育（２）」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第 62 号、査読無、2013 年、pp.25-37

〔学会発表〕（計 2　件）

原友美・清原みさ子・豊田和子・寺部直子「福岡県における戦後保育構築に関する実証的研究（１）」、日本教育学会第 71 回大会、2012 年 8 月

榊原菜々枝・豊田和子・原友美・寺部直子「福岡県における戦後保育構築に関する実証的研究（２）」、日本教育学会第 72 回大会、2013 年 8 月、一橋大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

清原みさ子（KIYOHARA,Misako）
愛知県立大学・教育福祉学部・教授
研究者番号：００００９０３６６

(2)研究分担者

豊田　和子（TOYODA, Kazuko）
桜花学園大学・保育学部・教授
研究者番号：８００８７９１５
原　友美（HARA, Tomomi）
愛知県立大学・教育福祉学部・非常勤講師
研究者番号：８０４４８７０３

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：